

何故否定か？

—Songs and Sonets にみられるパラドックス—

川口眞紀子

序

How great love is, presence best tryall makes,
But absence tryes how long this love will be ;
(‘A Valediction: of the booke’ 57-8)

愛の大きさは一緒にいてこそ 試しようがありますけれど
どれほど続く愛なのか 別離こそがよいはかり

Donne の *Songs and Sonets* は、一言でいって「愛の詩集」と呼ぶことができる。こゝに収められている数十篇の詩を、いろんな尺度から分類することができ、実際に様々な試みがなされている。例えば、愛をたてまつる詩と愛を呪う詩、女性讃美の詩と女性蔑視の詩。いわゆる Platonic love を志向する詩と肉体を謳歌する詩。——その他、尺度となるものは、技法の面からも、時代的・個人的背景との関わりの方からもとり出せる。それだけに、単純に「愛」ということだけに心を奪われてこれらの詩を読むならば、読者としては煙にまかれたような気分にならざるを得ない。Donne のいうことが実に支離滅裂だから。一篇一篇を切り離して読むと、それぞれは完結しながら互いに支離滅裂であるのに、詩集全体を一步離れて眺めみると、それぞれの問題点の解答がどこかに埋め隠されていて、一つのパズル盤のようになっていることが解る。いわば詩集が一つの完結体——自己完結する一つの大系となっているのである。この「自己完結性」こそが Donne の内面のもつ一つの大きな特色といえる。

I 存在の否定—‘A nocturnall upon S. Lucies day’ によせて

Donne 自身こういった自己矛盾に気付いていて

No lover saith, I love, nor any other
Can judge a perfect Lover ;
(‘The Paradox’, 1-2)

何故否定か？

真に恋をしているものは、恋してるとは 言わぬもの
まして真に恋しているとは 端目からは言えぬもの

恋をしている本人だけでなく、愛を、真の愛を語るということは不可能に近く、それでも敢えてそれをことばにしようとすれば、

If that be simply perfectest
Which can by no way be exprest
But Negatives, my love is so,
To All, which all love, Isay no.

(‘Negative Love’, 10-13)

否定の修辭とほでしかいえないものこそ
最も完璧なものだと言えるなら
まさにぼくの愛がそれなのだから
世の人すべてが愛するものをぼくは否という

ということになって、それ故に誰もが愛するような全きもの（と称せられるもの）全てを否定せざるを得なくなり、その人が愛するもの、完全無欠な愛とは——無（nothing）としか呼びようがない。しかもその正体は本人にも解らない（同、14—6）。本人にも解らず謎解きの巧みな者に教えてほしいという‘nothing’が Donne 愛の詩の決め手と言えるかもしれない。

恋人に先立たれた詩人は万物の原初ともいべき「無の精髓」(the Elixer of the first nothing) (29)。Songs and Sonets の詩集の中で最も美しい調べをもつともいえる ‘A nocturnal upon S. Lucies day, Being the shortest day’ には最初から否定辞が立ち現われる。

The Sunne is spent, and now his flasks
Send forth light squibs, no constant rayes ;

(イタリックは筆者による) (3—4)

(……聖ルーシーの) 陽は
いま火薬粉ほどの星屑
ちらちらと定まらぬ線香花火

一年中で一番夜が長いといわれる St. Lucy’s Day には太陽はごく僅かしか射さないし、その日射しもまるで線香花火の如くとぎれとぎれでか細い。そこには constancy はない。—— ‘The Sunne is spent’, ‘no constancy’ ということば——それだけで詩人の恋人との「別れ」

が十分予知される。そのとぎれとぎれの星屑のような明滅も ‘flasks’, ‘squibs’ となれば、はじめて、どこか破滅的で、生命感も感じられるが、その生命感も持続性はなく「消滅」の運命を匂わせる。が、この太陽は実は ‘the lesser Sunne’ にすぎず、真の太陽たる ‘my Sunne’ はもはや蘇らず、詩人は自らを「無」とすらも呼べない (I am None) と言い切ってしまう (37—8) までにはまだかなりの時間がかかる。

はかないものと感じさせられた生命も大地に吸いとられ、そこには water も air (香り) もなくて、四元素の中で最も下位に位する earth のみ。⁽²⁾ 絶望あるのみ。⁽³⁾ 「死」あるのみ(8)。しかし詩人はその中には身をおかない。むしろそれら生命の消滅による死を伝え残す墓碑銘 (Epitaph) たろうとする (8)。この Epitaph は「死」の事実の中から真実を若い恋人達に詩にして伝える。「死」の中に秘められた真実を。死の謎を。死の不思議を。死の死たるところを抜き出そうとする詩人が「死の中の死」(every dead thing) (12) と自らを称するの不可解ではない。

第2連には実に巧みに過去——現在——未来が凝縮される。愛する人の「死」は彼にとっても「死」——別離は「死」にも等しく辛いのに、それがまた「死による」別離とあってみれば尚更。その悲しみの「死」は「別かれの悲しみ」(privations), 「心の虚ろ」(emptiness), 「別離」(absence), 「闇」(darkness) であって——あるべきものが「ないこと」, 「存在しないこと」(things which are not) (16—7)。単なる闇なら、単なる虚無なら、ここでいう「ただの無」(an ordinary nothing) なら、いわば影のようなもので、そこには存在物と、そこに射す光がある筈 (35—6)。ところが光源たる the Sunne はなく、その光を受けて輝く body (heavenly body) もそこにはない。自己存在すらが知覚できないところに影の射すわけもない。あらゆる存在は、存在を有するものは、形相 (forme) を、魂 (soule) を、両者をつなぐ精気 (spirit) を手にして生命 (life) を帯び、存在 (being) を得る。詩人以外の「全」存在は、こうして「存在」(being) の方向へと向かう。それほどに詩人のあり様は類稀なものと言えよう。それは「愛の錬金術」(new Alchimie) による。alchimie は「無」(金ではない卑金属) から金を創り出す。中世、人々は信仰にも似て、錬金術師の業に熱中したという。賢者の石 (philosopher's stone) を使って、何もない筈のレトルト (limbeck) の中の錬金薬液 (elixer) から生ぜしめるものに眼を凝らした。愛の巧み (his art) が施す alchimie は「無」(nothingness) から「第五元業」(A quintessence) を抽出する。(12—5) 愛した人に死なれることはこれほどの奇跡を惹き起こす。過去において ‘an ordinary nothing’ と化したところへ ‘a quintessence’ を持ち込んだ。一担存在の否定へと追いやって、いきなり第五元素、それも第五元素のみの存在へと導く。これはもはやこの世の存在ではなく、それ故、この世的次元での全存在を否定する——「全存在の墓」(the grave of all) (21—2)。こゝでの ‘nothing’ (22) は、既に第2連での ‘nothingness’ (15) とは質を異にし、‘an ordinary nothing’ ではない。存在の目的も、在り方も、志向も、棄避もな

何故否定か？

い。何の属性も持たない「原初的無」(the first nothing)——存在以前の無，存在を超えた無，「存在」などという限られたものを問題としない無。(28—34)

Donne の世界では，恋人たちの世界は一個の完結した世界，宇宙によく喩えられる。恋する者は互いにそれぞれが一つの世界で——それでありながら二人の世界はまた一つの完結した世界。

Let us possess one world, each hath one, and is one.

(‘The good-morrow’, 14)

ぼくらにはぼくらの世界がある おたがいが一つの 二人で一つの 世界

互いの眼球は「完全」を示す球体で，天球にも似て，互いにとっての全世界たる恋人の姿がそこに映ればまさに完全な宇宙。

My face in thine eye, thine in mine appears,
And true plaine hearts doe in the faces rest,
Where can we finde two better hemispheares
Without sharp North, without declining West?

(Ibid. 15-18)

ぼくの顔がきみの眼に きみのがぼくの眼に映る
二つの顔に貞節な心が宿っているからは
よそには見られぬ極上等のつがいの半球
厳しい北も日の没する西もない常春の

その瞳の流す涙もまた小さな球体。互いの姿を映しつゝ溢れてはこぼれる⁽⁴⁾。こうして愛しあう恋人たちは，ときに泣いて涙の洪水を惹き起こし，全世界を溺れさせる(22—3)。天球は涙に溢れて溶け，涙の粒もこぼれ落ちてこわれ去る。恋する者たちが「全宇宙」とオプティミスティックにも考えた二人の世界はあえなくこわれ，残るのはカオス(Chaosses)。ちょっとした愛の秩序の乱れも，二人の世界をたちまちにして Chaosses へと引き落す(25—6)。「カオス」——それは「存在」が始まる前の，そもそもの「ことの初まり」の「形もなく中身もない」(without form and void)⁽⁵⁾「無」の状態。あるいはしばしの別かれを余儀なくされる時，魂だけが脱け出して相寄ろうとし，肉体は裳抜けの殻。魂が肉体から離れて脱け出す，というのは‘When bodies to their graves, soules from their graves remove’ (The Anniversarie, 20) とあるように「死」の定義でもあるのだが，また別の面から考えることも

できる。が、それは次の章に譲るとしよう。「存在の否定」へと詩人は至りつくが、皮肉なことにこれを彼は ‘the Elixer of the first nothing’ と呼んだ。‘elixer’ は当時、不老長寿の薬とも呼ばれていたのだから何とも皮肉な話である。

恋人たちは互いに深く愛しあうが故に全世界、全宇宙と化すが、それも破壊されて「カオス」へ「無」へと戻ってゆく。ついには魂が肉体から分離するに至り、あらゆるものが、あらゆる ‘good’ なものの一つとして手にした生命 (life), それによって存在 (being) と化した life の最たるあり様と思われた「愛」が「無」そのものであり「死」 (death) に等しいとはまさに paradox である。ところがこの paradox はこゝにとどまらず、更に深く偉大な paradox へとつながっていく。そのことは「愛」が詩人を滅ぼし (ruin), そのことにより再び虚無の中から蘇ったという条りに表わされる。

He (love) ruin'd mee, and I am re-begot
Of absence, darknesse, death : things which are not.

(17-18)

愛に破滅し 愛にわたしは甦る
無そのものの別離 闇 死から

無から有を生ぜしめるというのは、まさにあの神の創造 (Creation) の業にほかならず、大いなる paradox を含む。神の創造によって生ぜしめられた全存在物は4元素から成り立つが、愛の alchimie によって絞り出されるのは第5元素。愛に死し純化されて、大いなる根源的死となり、更に「死」を超越したこの世的でない霊妙な存在 (a quintessence) となる、とはまた更なる paradox というほかない。

かくして詩人は「無の無」 (None) と化した (37)。全てを超越し、「存在」すらも超越した。‘Elixer’ とでも呼ぶべきが、名付け得ぬ ‘None’。永い一夜を恋人への祭としよう。Elixer から生ずる新たな金は未来の恋人たちにまかせよう。「死」によって永遠性を手に入れたかに見える詩人の愛と存在に対する懐疑は、結局大いなる否定に席を譲ったことが解るが、「未来」を歌い込むことにより、否定され尽されない部分を残す。——東の間の虚しさや悲しみを超越する手段として完璧な無に生きることを教える (10—11) が、また自分とは無関係な生き方として性愛 (eros) に生きることも教える。暗い St. Lucy's Day が過ぎる頃、太陽の入る山羊座——性や淫楽や繁殖を象徴する宮——の保護のもとに夏の日を生きることを。そういい残して全てを虚しくした詩人の、存在感を感じさせない (存在を失くしたがゆえに) 最後の4行は——そこに至るまでのきらびやかな知的遊戯の華やかさがあったからこそ——あまりに静謐で哀しい。

何故否定か？

Since shee enjoys her long nights festivall,
Let mee prepare towards her, and let mee call
This houre her Vigill, and her Eve, since this
Both the yeares, and the dayes deep midnight is.

(42-45)

今屑永い一夜の祀りはあのひとのもの
あのひとの傍まぢかに行かせてほしい
このひと夜こそあのひとを祀る前夜祭
今屑 年一年の真夜中の 日一日の真夜中の

I 死を経て——‘The Canonization’によせて

愛にまつわる生と死の paradox はまだ続く。

愛しあう恋人たちは「情熱」(Passion), 「嘆息」(sighes), 「涙」(teares), 「絶望」(despaire) という四元素を含みつつ, 第五元素たる「愛」に燃える。互いに互いの心の中に入り込み, 互いの要素(元素)と化していた, というのだから, 互いが互いにとって第五元素でもあった。ところが彼女が死ぬことによって四元素を補充したから「生命」を与えられることになってしまった, というparadox。

And wee were mutuall Elements to us,
And made of one another.
My body then doth hers involve
And those things whereof I consist, hereby
In me abundant grow, and burdenous,
And nourish not, but smother.

(‘The Dissolution’, 3-8)

ぼくらは互いに互いの元素
お互いがお互いに構成しあっていた
ぼくの肉体はあの女の肉体を含みこんでいたから
ぼくの構成元素はあの女の死によって
内部で溢れ 過多状態 ぼくを養うどころかぼくを窒息させる

というのもこの詩のはじめにあるように, 「死ねばすべて原初の四元素に解体する」(all which die to their first Elements resolve;) (Ibid. 1-2) つまり, 肉体の死により, 「愛」

によって第五元素と化していた魂が離れ、身体はたゞの肉体四元素に戻ってしまうのである、この四元素は第五元素たる魂にとって構成物質 (materials)。Passion, sighes, teares, despaire であるのだから。互いが互いを構成しあう恋人たちは、我が汝を、汝が我を含んでいるのであってみれば、もはや二個の個体ではなく、まさに一体化しているといえる。詩人の内部の(詩人自身の)彼女が四元素に還ってしまえば、大いなる喪失である彼女自身の喪失により、詩人のそれまでの全ての喪失を補い尚余りあって、故にこそ更に——それほどの喪失ゆえに尚も絶望的に涙を流し、溜息をついて悲しみの想いにうちひしがれて四元素を消費し、第五元素たる魂のみと化して肉体から放たれて恋しい人の後を追ひ、追いつく——詩人も死に至るのである、すべてが逆説に逆説にと運ばれていくのが Donne の恋人たちである。

我が汝を、汝が我を含むあり方というのは、性の面からみれば 'The Relique' の中で詩人が後に続く恋人たちのために残す詩に示される。

First, we lov'd well and faithfully,
Yet knew not what wee lov'd, nor why,
Difference of sex no more wee knew,
Then our Guardian Angells doe; . . .

('The Relique', 23-26)

ともかくわたしたちはこよなく　そして忠実に
愛したけれども何を愛したのか　何故なのかも
判らぬまま性の違いに無頓着
それはもう楽園の天使さながらに……

それは性を持たない angel のようでもあったが、言い方をかえれば両性を具有する phoenix でもあって、「愛」が恋する男を滅ぼし、そのことによって再び虚無の中から蘇るという St. Lucy の詩の条りにも対応する。「愛」は神秘で、ろうそくの如く、我と我が身を焦がし、死に果ててゆくが、死して再び蘇り、それも何ら変わることもなくもとの姿のまま蘇り、昇天する。二つの性が和合して中性と化し、いわば二つの存在でありながらそのままに一つの存在といえるのである。

We're Tapers too, and at our owne cost die,
And we in us finde the'Eagle and the Dove.
The Phoenix ridle hath more wit
By us, we two being one, are it.
So to one neutrall thing both sexes fit,

何故否定か？

Wee dye and rise the same, and prove
Mysterious by this love.

(21-7)

それにふたりは蠟燭だ
自分の生命を燃やして果てる
俺たちには驚と鳩が棲んでいるんだ
不死鳥の不思議がふたりの例で よくわかる
ふたりでひとりの俺たちは 不死鳥そのもの
ふたつの性が和合して中性と化す
俺たちは死して甦り 奇蹟となるのだ
この恋ゆえに

‘The Canonization’ の一節である。詩人は「ふたりは恋に死ねる 恋に生きられなくても」(Wee can dye by it, if not live by love) (28) と追いつめられた恋人たちのような科白を吐くが、実はその裏に「死を生きるより、生を死ぬ」という思いがあるのである。一度身を滅ぼすことによりなお熾烈に蘇る。それはまたそのままに愛の殉教者の姿であり、復活が予見され、ために聖列加入 (canonization) も認められる。そういった愛はそれだけで自己完結した世界であり、彼の眼球のイメージへと収約していく。聖の世界では聖列に加えられ、俗(芸術)の世界では見事な骨壺 (a well wrought urne) に取められて、「他」から認められる形を取る (23—36)。a well wrought urne——それは詩行 (verse) であり、‘sonnets’ であって ‘pretty rooms’ である。‘room’ はイタリア語での stanza への言及であると同時に、‘The Sunne Rising’ に出てくるあの room——小宇宙でもあるだろう。他から認められる形をとりつゝ、実は自分たちだけの完結した、小さなしかし全き世界へと入り込んでゆく。二でありながら一という奇妙な数学——否、哲学というべきか——はこの話の出発点であった。全きもの全ては nothing だという paradox と質を異にすまい。

が、こゝで少し視点をずらしてみよう。

この詩の5つの連のうち2つ迄を費して詩人は、自分の「愛」を主張する。それぞれの連は共に最後の1行「そのかわり俺の恋に口出しするな」(So you will let me love) (9), 「俺と彼女が恋をしようとする……」(… Though she and I love) (18) のためにある。そこ迄主張する「愛」とは一体どういうものなのだろうか。先の見方によればキリストの「愛」の如く神秘的で、愛に死すことにより蘇り、聖列に加入されるという agape に近い「愛」。が、ろうそくのように赤々と熱く燃え、溶け、消耗して尽きてゆく、一方が驚であって一方が鳩、それが合体して「一つ」になる……となればセクシアルな交渉の図とも取れないであろうか。

Donne の ‘oneness’ への志向は——一つには純粹性、統一性、この世的なものの超克への

果てなき願いであり、同時に一つには男と女の合一を示し、「死」はそれに伴う忘我と不活性状態。そういえば phoenix というのは何ともエロチックなイメージではないか。詩人と恋人とはそれぞれ一つの性を有する二者でありながら一つの存在と溶けあって互いの性を相殺し合い、いわば中性の存在と化し、エクスタシーに至るかと思えば、またもとの二つの性となって立ち上がる。そういう風にして古来の phoenix の謎は更に意味をつけ加えられるのである。

「死」により、人の魂は肉体から離れるという考え方は前にみたとおりであるが——それがまさに ecstasy の状態——ex-stasis——魂が身体の外に存在すること——なのだから——そう考えれば「愛することで生きられないにしても、愛しあって死ぬことはできる。」という1行は簡単に理解できる。後には死のイメージが続くが roome, urne とつながっていくと——「女性そのもの」をイメージしている気がしないでもない。聖愛も性愛も共に安らぎ(peace)であり、互いに安息の場(hermitage)であって、全世界にも匹敵する意味をもつ。(40—44)

この二つの読み方を考えてみると、Donne の執幼なまでの純化された「愛」と純化された「存在」のあり方(それは「存在」の否定そのものに迄至るのだが)も、また同じく執幼なまでの肉体への志向も、つまりは同じ一つの内面のあり方ではないかと思われてくる。共に今ある存在を破壊することに焦点があてられ、個我を抹殺していこうとする。この上もなく自我の強い、そういう意味では近代人的な詩人が——その自我を抹殺しようとするのは何故なのか？全体との連体性志向との見方もあるが、更に深く、他からの絶縁を測っているとみられる詩も少なくないのである。⁽⁶⁾ ‘The Canonization’ における詩人は pretty rooms へ、 a well-wrought urne へと自己完結して入っていこうとする。——まるで正反対の方向性が共存するのをもまた Donne らしいといえるであろうか。

Ⅱ エクスタシー——新たなる存在——‘The Extasie’ によせて

肉体を伴う限り2個の個体、存在でしかあり得ない二人が個我を殺して他(another)と一体化する安心は、またそれ以外の他(others)からの絶縁でもあって——逆にいうならば、あらゆる他から隔絶して完結するにも、あらゆる他と溶けあうことにも耐え得ない詩人のとり得た唯一のあり方であったといえるかもしれない。Songs and Sonets の世界にある限り、詩人のあり方はそこにとどまる。

二人がどんなに愛しあおうと二人は二個(two)であり、どんなにひたとみつめあってもその視線は二本がよりあわさった一本の視線(one double string)にすぎず、二つの手を接ぎ、二つの映像を瞳に映し出して一体化の幻想を抱き、小宇宙を形成しようとするにすぎない(4—12)。だが、深い愛ゆえに physical な世界の支配——肉体、性、時間、空間の支配から脱け出て ‘ecstasy’ の状態にある魂は精妙に混合されて——全く等しいものとされて——それ故に区別がつかなくなる。

何故否定か？

But as all severall soules containe
Mixture of things, they know not what,
Love, these mixt soules, doth mixe againe,
And makes both one, each this and that.

(33-6)

魂はもともと複雑な混合物
その魂を二人の愛がまた混ぜあわせ
貴方お前の区別なしに
二つを一つにしてしまう

それぞれが this であり that であって区別もつかない——相等しい質，大きさ，深さをもって完全なバランスを保ち，朽ることがない。それぞれが完全な一でありながら，しかも両方で一というあの phoenix の riddle である。‘Let us possess one world, each hath one, and is one’ と詩人が恋人に語りかけるゆえんである。そこでは相等しく混合されれば ‘die’ することはない。

If our two loves be one, or thou and I
Love so alike, that none doe flacken, none can die.

(‘The good-morrow’, 20-1)

ぼくらの愛がひとつのもので きみの愛とぼくのところが
弛まぬほどに同じ強さなら ぼくらにとって死なんて ありゃしない

こゝでいう「死ぬことはない」というのは、「愛」そのものが終焉を迎えることはないということ。どちらかがどちらかを裏切り，どちらかがどちらかを離れ，どちらかが先に変化してゆくという⁽⁷⁾，別かれの「死」はない。「変節」はない。そんな純粹な魂 (soules) から作り出された魂 (soule) なのである。⁽⁸⁾「愛しあう」ことによって得た ‘ecstasy’ (恍惚) は——そのセクシアルな高みにおいて，二人をつき動かした衝動が性ではないことを教える。

When love, with one another so
Interinanimates two soules,
That abler soule, which thence doth flow,
Defects of lonelinese controules.

(41-4)

愛の場合も

二つの魂を一つにし

力を倍にした魂が

こうして孤独を乗り越える

この条りは非常に印象的に心に残る。孤独 (loneliness) などということばは Donne とは無縁のように思われていたから。H. C. Combs と Z. R. Sullens による concordance にも取り挙げられていないほど、詩作品においては珍しい語だからである。Donne は lonely などとは感じず、己の心の赴くままに生きていたように、その恋愛詩においては思われる。が、実はあれほどに恋人との一体化を, unity を求め、しかし二人だけで完結しようとするのは、この loneliness からのがれるための解決策にほかならないのである。神の大いなる paradox——その創造において Eve を創ったのは「人間がひとりであるのは良くない」(It is not good that the man should be alone;⁽⁹⁾) からであり、孤独に耐え得ないからだともいう。⁽¹⁰⁾人間は本来、そもそもの創造において「独り」であり「孤独」であるにも拘らず、「孤独」には耐え得ない弱さをもつ——Donne の懐疑, 自己否定, irony, paradox——その全ては、自ら気付いていたか否かは別として、この loneliness 故であったのではなかろうか。あの小宇宙の形成への志向にも、彼の疎外感がよく表われている。孤独の超克は意志的なものであり、故に「愛」の力で 'abler' (勇気を得, 力を得た) となった魂のみに可能であるが、魂は突如として、強い調子でこう切り出す。

But O alas, so long, so farre

Our bodies why doe wee forbear?

(49-50)

けれどまあ なぜまたこうも長いこと

ぼくらはぼくらの肉体を そのまま放っておくのだろう

肉体から抜け出し、恋人同志で一つの unity を持とうとした詩人は更に両者の肉体をも含めて一つの世界を展開しようとする、肉体と魂とを、天界の軌道とその上を星に乗って運行する天使に喩えるのは、Donne としては珍しくない宇宙論である。軌道がなくては天使も動けず、天使がいなくては軌道も用をなさない。軌道を巡る天体は大気の衣をまとわなければ地上の人には作用できない。天使が空気の翼と顔とをつけなければ下界に作用できないのと同じように。魂は肉体を身にまとして、肉体に乗っかってはじめて動ける。感覚 (sense) という力を身につけて、知覚しあい、作用しあうことができる。この魂と肉体とをつないでいるのは精気 (spirit)。天使 (angel, intelligence) は神 (ethereal なもの) と人 (earthly なもの) を結

何故否定か？

びあわせるもの——air に近い ether (quintessence)。この ether と air との間を微妙に受けもち、ややもすると隙間のできそうなこの二者の間を結びつける、かくも緻密に、微妙に「人間」は創られている。それも意志的に。まさに「脆い結び目」(subtile knot)なのである。このどこかで僅かでも balance が崩れると人間という小宇宙はこわれてしまう。魂の中に育つ愛の神秘は肉体の上に表わされ、肉体により伝えられる。——あれほど堅固に結ばれていると言い切っていた二人の間も(1—20) ‘ecstasy’ を経て ‘unity’ となり、refine され、完結していったが、精妙なる故に、微妙で危い、危い故にそれだけ神秘で真実。

肉体から離れた魂の純粹性を説き、Platonic love を讃美するかの如く見えた詩も途中で一変し、逆に肉体的愛を推賞するかのようみえたが——そうでもない。

Let him still marke us, he shall see

Small change, when we're to bodies gone.

(75-6)

気をつけて観察してごらん ぼくらが肉体へ戻ろうと
魂の愛に変るところはありやしない

肉体から離れていようと、肉体をまもっていようと、魂に変化はほとんどない——というのだから、どちらでもいいのだと皮肉な観方をするのも可能だと Donne は気付いていただろうか。しかし、この肉体をまとった魂を肯定するには、肉体をも含めて全人間的に、一個の完結された人間に一つの世界を見、‘ecstasy’ を経験させる eros の世界を垣間見、「死」を経ることが必要だった。全てを受け容れるところにこそ完全な愛を観るのである。しかし愛をより完全なものへと考えていけばそれだけにその愛が全てだといえなくなる。完全、とはいえなくなる。最初に挙げたように愛について口にすることなどできず、それでも敢えて口にしよとすれば否定的な言い方しかできなくなる。

IV 再び否定へ——おわりに

一つの愛を「完全」(total) と言い切ることは、その愛の限界を示すことになり、その愛が「不完全」(partial) なものにすぎないことを自ら表現することになり、「不完全」であることを認めるところにこそ「完全」な愛の可能性をみることができる。そのとき愛の「完全性」は永久に可能性にとどまり、つまりは「あり得ない」ということになってしまう。‘I shall never have it (i.e. thy love) all’ (‘Lovers infiniteness’, 2) (あなたの愛すべてを得ることはもうあり得ない), ‘I shall never have Thee All’ (11) (わたしがあなたのすべてを手にはすることはありえない) と嘆きながら ‘The ground, thy heart is mine, what ever

shall Grow there, deare, I should have it all' (21-2) (あなたの心は大地 それはわたしのもの、そこに何が植えられようと 恋しい人すべてはわたしのものだ) と確信しようと論理の構築を試みつつ、やはり 'Yet I would not have all yet' (23) (いや やはりすべてが欲しいとは思わない) といわざるを得ない。求める汝の愛の完全性を願えば完全な所有は叶わず、完全な所有を求めれば自ら完全性をつき崩してしまう。Donne は実に paradoxical な絶望感を示す。それを解決する策をみつけようとする詩人は語りかける。

Then changing hearts, to joyne them, so wee shall

Be one, and one anothers All

(32-3)

心の交換なんかでなしに二つの心を合わせよう

わたしたちは一つとなりともにすべてを手にしあうのだ

「完全」であることが「不完全」であるという絶望的な人間観から出発した詩人のみつけ出した結論が、'one' であることが 'all' であるとは、また矛盾をはらんだ解決である。

汝が我を含み、我が汝を含み、汝が我に重なり、我が汝に重なり、二人が完全に一体となる時、汝は過不足なく我であり、我は過不足なく汝となる。汝が即我、我が即汝であれば、互いに互いの全存在となる。それでもなおそれで終わるなら、またもや限界を不完全性を——認めるという苦渋を味わわねばならない。愛は成長するもの、すべきものだから。⁽¹¹⁾ 求めてやまぬ Donne の心は恋人をめぐる同心円と同じ、水面に広がる波紋のようにどんどん拡がって一つの宇宙を形成していく。⁽¹²⁾

'No where Lives a woman true, and faire' ('Song: Goe, and catche a falling starre', 18) (貞節でしかも美しい女という不思議ばかりは世になし) といい、 'For by to morrow, I may thinke so too' ('Womans constancy', 17) (明日になればぼくもきみとおんなじことを考えるかもしれないから——裏切るかもしれないの意) と自嘲し、——それでいて 'Who is so safe as wee? where none can doe Treason to us, except one of us two.' ('The Anniversarie', 25-6) (これほど安泰な生があるものか、裏切者が出るとしても、きみかぼくしかいないのだから) ともいう。完全に貞節で、完全に美しいというのも女性とその愛を限定することに他ならないから、その否定はあるいは真の意味でその完全性を暗示する。'I can love her, and her, and you and you, I can love any, so she be not true.' ('The Indifferent', 8-9) (どれでもかでも愛せる どのきみでも愛せるんだ ただ不実な女でありさえすれば) というのも、 'since you will be true, You shall be true to them, who'are false to you.' (Ibid. 26-7) (貞節を志すというのなら不実な男に貞節つくすことになりますよ) ということにほかならないから。深く愛すれば、溜息をつき、涙を流し

何故否定か？

て愛する人を殺すはめになりかねない（‘Song: Sweetest love . . .’ 25-32）⁽¹⁸⁾ 求め求めても否定にしかつながらず，否定することによってしか平安は得られない，という paradox の中に深く埋没していってしまう。それを切りくずす，ことばの手品の手をあれこれ考えては楽しんでいる Donne ではあるけれど，やはり，その先の「完全な」安心は得られない。

Some that have deeper digg'd loves Myne then I,
Say, where his centrique happinesse doth lie:

... ..

Oh, 'tis imposture all :
And as no chymique yet th'Elixer got,

(‘Loves Alchymie’, 1-7)

この俺より深く愛の鉱脈を掘った御仁よ
愛の至福の中心は一体どこか教えておくれ

... ..

そうとも そんなものは みんな出鱈目さ
錬金術士に霊薬が作れたためしはない

いわばことばの錬金術を試みようとする彼も「霊薬」などつくれるわけがない——たゞ彼は自分でそれを認識していて、「多産な壺よと讃めあげたり」（glorifies his pregnant pot）はしない。できはしない。ますます皮肉に，徹底的に皮肉に，不可能性の錬金液から，真実の，完全性の，純粋性の金を取り出す操作を続ける。決して金を産み出さぬ錬金術——それでもとりつかれたようにレトルトをかきまわす Donne の姿は，錬金術がもはや幻想にすぎなくなり，過去のものとなっていたルネサンス后期の社会の不安をそのままに映し出し，その中で疎外された孤独感を，存在論的絶望感を，読む者の心に投げかける。Donne の姿勢が醒めれば醒めるほど熾烈なものとなって。

When love, with one another so
Interinanimates two soules,
That abler soule, which thence doth flow
Defects of loneliness controules.

(‘The Extasie’, 41-4)

註

本文中の引用は全て次のテキストによる。

H. J. C. Grierson (ed.), *The Poems of John Donne*, Vol. 1. (O.E.T.)

訳文は次の訳詩集による。

河村錠一郎訳『ダン・エレジー，唄とソネット』（1970，現代思潮社）

- (1) 原文は以下の通り

But I am by her death, (which word wrongs her) Of the first nothing, the Elixer grown ;

- (2) The worlds whole sap is sunke :

The generall balme th'hydroptique earth had drunk, . . .

(‘A nocturnall’, 5-6)

- (3) My fire of Passion, sighes of ayre,

Water of teares, and earthly sad despaire, Which my materialls bee,

(‘The Dissolution’, 9-11)

- (4) Let me powre forth

My teares before thy face, whil’st I stay here,

For thy face coins them, and thy stampe they beare,

.....

When a teare falls, that thou shalt which it bore,

So thou and I are nothing then, when on a divers shore.

(‘A Valediction: of weeping’, 1-9)

- (5) *Genesis*, I, ii

- (6) 藤井治彦他『ルネッサンスと反ルネッサンス』（『シンポジウム英米文学』第1巻）pp. 190—1。

- (7) Donne は ‘death’, ‘die’ ということばを二重に使う。本質的に現存在，個我の否定である「死」と一時的，肉体的別れの「死」，故にここでは「死なない」ということが，そのままに本来的死——エクスタシーを意味するという二重性の面白さがある。

- (8) ここではじめて *soule* が単数としてつかれられる。それまでは一体となっていたとしても二個の存在であったのが，ここに至って完全な一体化——もとの「二」としての存在を止揚した存在をみる。 *Wee then, who are this new soule . . .* (イタリックは筆者による) に ‘ecstasy’ の極地が描かれる。

- (9) And the Lord God said, It is not good that the man should be alone; I will make him an help meet for him. . . .

And the rib, which the Lord God had taken from man, made he a woman, and brought her unto the man. . . . *Genesis*, II, xviii-xxiv.

- (10) Cf. Milton, *Paradise Lost*

- (11) Cf. ‘Loves Growth’

- (12) If, as in water stir’d more circles bee

Produc’d by one, love such additions take,

Those like so many spheares, but one heaven make,

For, they are all concentrique unto thee,

(‘Loves Growth’, 21-4)

- (13) When thou sigh’st, thou sigh’st not winde,

But sigh’st my soule away,

When thou weep’st, unkindly kinde,

My lifes blood doth decay.

It cannot bee

That thou lov’st mee, as thou say’st,

何故否定か？

If in thine my life thou waste,
Thou art the best of mee.

テ キ ス ト

- H. J. C. Grierson (ed.), *The Poems of John Donne*, Vol. 1. (O.E.T.)
H. Gardner (ed.), *John Donne, The Elegies and the Songs and Sonnets* (1965, O.U.P.)
A. J. Smith (ed.), *John Donne, the Complete Poems* (1971, Allen Lane, London)
T. Redpath (ed.), *The Songs and Sonets of John Donne* (1956, Methuen, London)
J. Reeves (ed.), *Selected Poems of John Donne* (1952, Heinemann, London)

参 考 文 献

- 河村錠一郎訳『ダン・エレジー、唄とソネット』(1970, 現代思潮社, 東京)
I. Walton, *The Lives of John Donne etc. (The World's Classics)*
R. L. Colie, *Paradoxia Epidemica, The Renaissance Tradition of Paradox* (1976, Archon Books)
M. Roston, *The Soul of Wit, A Study of John Donne* (1974, O.U.P.)
J. B. Leishman, *The Monarch of Wit* (1951, Hutchinson U.P., London)
J. Stampfer, *John Donne and the Metaphysical Gesture* (1971, Simon and Schuster, N.Y.)
D. Louthan, *The Poetry of John Donne. A Study in Explication* (1951, Greenwood, Westport)
J. R. Roberts, *Essential Articles for the study of John Donne's Poetry* (1975, Archon Books)
楠瀬敏彦『詩と信——ダンをめぐる詩人たち——』(S. 46, 啓文社, 京都)。
グスタフ・ルネ・ホッケ『文学におけるマニエリスムス』(全二巻) (1977, 現代思潮社, 東京)。
藤井治彦他『ルネッサンスと反ルネッサンス』(『シンポジウム英米文学』第1巻) (S. 49, 学生社, 東京)。
『現代思想』(1977, 6月号) (青土社, 東京)。